Osaka University Knowledge Archive

Title	ルキアノス『ニグリノス』とローマ風刺
Author(s)	内田, 次信
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2007, 47, p. 123-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5961
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ルキアノス『ニグリノス』とローマ諷刺

内　田　次　信

『ニグリノス』は，ルキアノスの全作品中有数の問題作であり，謎めいているとも評される。「古代の全作品のうちもっとも多様な解釈が加えられている作」とホールは言っている。[1] それは，一面では，語り手の「回心」の記録であるかのような趣を呈する。しかしその告白めいた話はあまりにもおおげさで修辞的で，そのまま素直には受け取りにくい。他方では，ニグリノスの言葉を通じて，アテナイと対比したローマの風俗への諷刺という性格を示す。「回心」談とローマ諷刺という，ふたつの主題は互いにどう関連するのか。

またニグリノスという人物も問題である。この名前自体は珍しいものではなく，碑文にその名が見いだされもするが，ルキアノスと同時代のプラトン派「ニグリノス」は，本篇以外の資料からはまったく知られていない。このことは，彼が人を「三倍に幸せにする」（一章）というほどの感化力を持つ哲学者とされているのだから，いっそう不可解である。ニグリノスはプラトン派として紹介されるが，彼の実際の話にはその哲学派的特徴は認めがたい。虚構人物と言う説や，他の実在人物を仮名で表しているという見方がある。以上の問題は互いに絡み合っている。

構成的には，序としてルキアノスからの「ニグリノスへの手紙」が全体の冒頭に置かれ，「ニグリノスの哲学」と題された本体部分がそれに続く。この本体部は，「回心」告白を含む対話部分と，ローマ批判を主内容とするニグリノスの話とから成り，前者が後者に対する枠組みを形成する。すなわち対話者の一方が，自分の「回心」のことを相手に告白しつつ，というより誇らしく語りつつ，それを引き起こしたニグリノスの話の主旨を伝える，という形式をとる。「回心」は，この枠組み的対話部分の始めのみならず終わりでも繰り返し言明され，それだけ強調されるが，おまけに相手の対話者も，それを聞かされるうちに「傷つけられ」，狂犬病に伝染したかのように自分も（哲学的な）「狂気」に陥る（三八章）という結果を誘発する。

冒頭の書簡部でルキアノスはニグリノスの弁舌によって自分が蒙った「魅惑」された状態について述べている。本体部では両対話者の名は記されていないが，主たる話者が，上の概観で見たように，自分のニグリノスとの会談とそれによって受けた熱狂的精神状態とのことを相手に語っている。したがって，この主たる話者はルキアノスとある程度対応する。ただし同一とまでは言いがたい。わが国の私小説のようないわゆるオートフィクションでは，

「私」が一面では作者自身を素材にしその経験を描いているかのように思わせながら，他方では作品に浸透している虚構性を感じさせ，虚実の混じり合い，その境界の不分明が読者を迷わせることがある。問題は，フイットマーシュのようにそういう曖昧さそのものを本篇の主眼と見て，ここでは「心から感じられた声（ヴォイス）のとらえどころのなさ」が劇化されている，ここのローマ諷刺におけるような「ギリシア人のローマ観」はルキアノスにおいては実体のないものである，要するにルキアノスの態度は，自分自身を思わせるような叙述スタイルも含めて，アイロニーである，と見なすか，[2] それとも，空虚な戯れや修辞的な装飾があることは認めつつも，その陰から作者自身の肉声や体温のなにがしかが伝わってくると基本的にはポジティヴに解するかである。

ローマに旅したルキアノス的語り手は，プラトン派のニグリノスを訪問し，彼がアテナイの生活を讃えローマのそれを非難しつつ，富や名声といった現世的価値の虚しさを説くのに聞き入っているうち，その弁舌に圧倒されて，それまでは尊んでいたそれらのものを卑しい笑うべきものと思うようになった，という。この際に彼は，「長いこと魅せられたように彼（ニグリノス）を見つめ，ついで錯乱と目まいにひとしきり襲われながら，ある時は汗をどっと流し，ある時はものを言おうとして詰まり，とちってしまい，声も出せずに舌はもつれて，最後には途方にくれて泣きだしてしまった」（三五章）といった，激情的な「支離滅裂な」（四章）体験をしたという。そして「三倍に幸せ」という至福な状態にいま自分はあると言う（一章）。

「回心」という言葉自体は実際は用いられていないが，「これまでの人生の小暗い霧が晴れ，青天の巨きな光を見上げているような」（四章）という表現が，プラトンの「眼を暗闇から光明へ転向させる」，「魂を，なにか夜を混じえたような昼から転向させて，真実の昼へと向け変えること…つまり，真実在への上昇ということ」（『国家』五一八 c，五二一 c，藤沢令夫訳）といった「魂の向け変え」（プシューケース・ペリアゴーゲー）についての言葉を想起させるように，文面上は明らかに哲学的な意味での心の開眼のことが語られている（二章「眼の病」についての言葉参照）。「回心」とは，「真実在」という形而上的なものへ，全存在をかけて意識を転回することであろう。それが生じるためには，その存在を根底から突き動かす強烈に超俗的な働きかけが必要なのではないか。ところが，それほどの感銘と衝撃を作者に与えたとされるニグリノスの話においては，哲学への勧奨（プロトレプティコス）などの哲学論議よりもむしろ，アテナイでの生活への称賛と対比されるローマ風俗への批判に大部分が費やされる。たとえばアッリアノスらを心酔せしめたエピクテトスの説法では，同時代の社会状況への言及はまずなく，むしろ例を引くときは時代と所を超えて通用するものを用いながら，自由意思や生死の問題などを論じている。ニグリノスの話には，エピクテトスがストア派的な自由意志論を開陳するのに対応するような，プラトン派的立場を思

い起させる思弁的議論はない。それはむしろ，ディアトリベ的な世俗道徳論の性格を示している。彼の話が，そのような熱狂的な反応と超俗的「回心」を引き起こすというのは，われわれには不可解である。

ニグリノスがかりに犬儒であったら，あるいはそれもありえなくはないとすべきかもしれない。もともとルキアノスにとっては「哲学」は，決して高遠に複雑な思想を意味するものでない。彼はむしろそのようなものは拒否する。彼は犬儒的なデモナクスを「もっとも優れた哲学者」(『デモナクスの生涯』二章）と称してその伝記を著したが，われわれから見るとデモナクスは独自の深い思想を持つ哲学者とは思えない。ルキアノスには明らかに犬儒派への共感が認められる。そして犬儒派にまつわる「回心」伝説の数々が伝えられている。しかしながらニグリノスは犬儒ではない。たしかに当時の哲学諸派の教義的な区別は多々あいまいになる傾向があった。しかし本篇で描写されるような興奮が，彼の属するプラトン派にふさわしい高遠な —— 当時のプラトン派には神秘主義的傾向が強かった —— 思想によってではなく，むしろ他派を思わせるような，あるいは世俗的道徳論の気味を持っているような説法に惹起されるというのは，そしてそれをわざわざ当人への手紙で謳い上げるというのは，むしろ相手への侮辱ともいえるのではないか？

そもそも人は自分を，「素質に恵まれた」「哲学に近しい性」（三六，三七章）を持つ者と，本気で言うだろうか。「回心」後のおのれの高慢ぶりを自ら認めひけらかすのは（五章，一章参照），額面どおりに取れば，あまりにも嫌味な自己描写ではないか？

ルキアノス的語り手は，富や名声といった世間的価値観を卑しみ笑うようになったと言う（四章）。しかしルキアノスは，実際のところは，名誉や地位などの世俗的幸福を，それ自体として否定したことはなかったのではないか。むしろ，少年の時は華々しい出世に憧れ（『夢』），成功者として故郷に錦を飾って誇らしげな顔を見せ（同），老いてはエジプト総督に仕えることができたことを（半ば後ろめたくは感じつつも）喜ぶ（『弁明』）—— それがルキアノスなのではないか。(3)

本篇での「回心」の記述は多分に遊戯的なアイロニーなのではないか，また語り手と作者自身との対応もこういう点では真面目に意図されてはいないのではないかと言わざるをえない。(4)

しかしながら，話者のそういうアイロニカルな自己呈示はともかくとして，分量的にも構成的にも本篇の主たる内容がローマでの生活への批判的諷刺的描写であることは確かである。ただこれはルキリウス以来のローマ諷刺詩の伝統的テーマに属し，ローマに何回か旅したことはあるとしても普段はアテナイ等ギリシアに居住するルキアノスのようなよそ者が手懸けるのはいくぶんおこがましい。それは，序での表現を使えば，まさに大胆な試みと見られかねない。また，競馬への情熱等の「微罪」を数え上げても帝国の安全を脅かすわけではない

から，諷刺をカムフラージュするまでもないはずだ，とも論じられるが，[5] ローマ人パトロンや知り合いを持つ作者にとって，彼らの機嫌に気兼ねする必要はやはりあったと考えるべきである。[6] プラトン，あるいはサッポーのパロディーという感を与える激情的に大仰な「回心」告白がわれわれに感じさせる滑稽味は，ローマ諷刺をあえて試みる大胆さをぼかし，読者が場合によっては感じるかもしれないその毒気を抜く工夫であると解せよう。

ところで，諷刺詩人の自己戯画化，ということも，すでにローマの諷刺詩で見いだされるモチーフである。顕著な例として，ホラティウスの『諷刺詩』Ⅱ７を挙げておこう。そこでは，ストアの教説をかじった奴隷ダウゥスの口を通じて，悪徳の諷刺家たる詩人自身が，首尾一貫しない人間，自分自身の悪業を隠す偽善家，あるいは恒心のない浮わついた男，などとして揶揄される。たとえば彼の自己矛盾の一例として，「ローマにいるときはあなたは田舎に焦がれ，田舎にいれば遠くの都を天上にまで持ち上げる（称賛する）」（二八行以下）とダウゥスは言う。これは，都会の生活の煩わしさを描きつつ，サビニの農園での暮らしを賛美する有名なⅡ６の趣意を自ら打ち消すように聞こえる。世の悪徳を難ずるホラティウスが実は秘かな姦通者である（Ⅱ七，四六行以下），というのは明らかに詩人のふざけで，読者はだれも真面目に受け取らないだろうが，「あなたは一時間たりとも己れのもとにいることが出来ない，…己れ自身を避けようとする逃亡者にして放浪者だ」（一一二行以下），というダウゥスの批判に詩人が怒りだす，という最後の場面では，モラリストたる自分自身へのやましさめいたものを，なかば戯れなかば自白的に表現しているように見せている。[7] もちろんそのような自己諷刺が真実であるかどうか，という点は問題ではない。むしろそれが意図する毒気抜きにこの作の本旨があると筆者は言うのである。

元来，人を悪く言うものは，やり返されるのが習いである。たとえばイアンボス作家アルキロコスはたちの悪い毒舌家として非難された。諷刺家は相手からの反撃を敢然と迎える覚悟を決めるか，それが向かってこぬよう予防的に回避する手立てを講じるかせねばならない。ローマ諷刺詩の祖ルキリウスは，スキピオやラエリウスの庇護を頼むことができたからか（ホラティウス『諷刺詩』Ⅱ１，六二行以下参照），あるいはもともと剛胆な人であったからか（ユウェナリスⅠ，一五一行以下参照），とにかく大胆果敢な筆鋒を同時代人に向けて揮い続けたように伝えられるが（ただし断片しか残らないのでどこまで本当にそうだったかは確認できない），ホラティウスやユウェナリスは，ポーズの上では勇ましい様子を見せることはあっても，実際はむしろ反撃を回避する工夫をしている。

ルキアノスも硬派の諷刺家ではなく，本篇での自己戯画も，ローマの諷刺詩から学んだにせよ，諷刺作家の本能から独自に考え付いたにせよ，その大胆な試みをオブラートしようとする工夫である。「回心」ないし「転向」の話題は，ルキアノスの他の作品でもしばしば揶揄の材料にされる（とくに『二重に訴えられて』では，放蕩者ポレモンのアカデメイア派へ

の回心，ストア派ディオニュシオスのキュレネ派への転向等の話題を面白おかしく訴訟場面に作り，シリア人すなわち作者の弁論術から対話への転向の主題へつなげる)。いまはそれを自分をだしにし，単純軽薄な自分を読者に提示することによって，行なっているのである。しかし作者の自己滑稽化は，彼が主内容として提示するローマ諷刺をも単なる戯れごとに化す，というまでにはいたっていない。いま引き合いに出したホラティウスの『諷刺詩』II 7でも，ストア派の説の一部は茶化されるものの，「己れを支配できるものこそ賢者」(八三行) といった核心的な点は否定されていないと考えられる。

ルキアノスのローマ諷刺における新機軸は，アテナイ人の粋で教養ある哲学的生き方と対比する形で，ローマでの悪風・悪徳を描写したその二都のシュンクリシス (比較) の仕方に見いだされるであろう。もちろん，二都の比較自体は当時の人々の心に容易に思い浮かんだものに違いないし，ソクラテス的哲学的理想の観点からのローマ批判は，ディオンの第一三篇にも見いだされる。[8] しかしディオンの理論的観念的演説とは異なりルキアノスは，両都の生活を具体例の数々で彩りながら提示する。それはまさにホラティウスやユウェナリスの諷刺詩を想起させる。[9]

生粋のローマ人たる[10]ニグリノスの語るローマ諷刺・批判を伝えるという形を取る本篇の序論において作者は，己れの「文才を見せびらかしたい」という気持ちからこれを執筆したのではないと弁明している。しかしこの作は，ローマの諷刺作家たちと敢えて，しかし韜晦しつつ，張り合おうとするルキアノスの野心作なのではないか？ その場合「ニグリノス」とは，ルキアノスの秘かな挑戦が向けられる彼らローマ詩人たちであるのかもしれない。[11]

要するに，「回心」の記述は大げさすぎ，滑稽の気味もあり，まともには信じられない。しかしながらそれは，「回心」談の語り手の仮面の奥に隠れる作者のローマ諷刺の意図をぼかす役を果たしている。「ローマ人」ニグリノスのローマ諷刺の言葉は，ローマ人作家によるその種の作品を想起させる。この短篇は，ローマ諷刺という意図とともに，ローマ人作家への挑戦という側面も持っている。

註

(1) Hall, J., *Lucian's Satire*, New York 1981, 157. それらの解釈の紹介は，Bompaire, J., *Lucien écrivain,* Paris 1958, 509以下，同ビュデ版 (Paris 1993) 89以下，Hall 157以下，Macleod, M.D., ANRW Bd. 34 (2.Teilband) 1389以下参照。なお邦訳は，内田訳『ルキアノス選集』(国文社 1999年) に収録されている。

(2) T. Whitmarsh, *Greek Literature and the Roman Empire,* Oxford 2001, 247 sqq. ルキアノスと対話部分の語り手との同一性を否定する学者について Macleod, op. cit. 1390参照。

(3) Hall 497 n.13参照：「ルキアノスがニグリノスによって本当に「回心」させられたのなら，

彼は生涯を通じて一種の自己矛盾を呈している」。

（4）語り手すなわちルキアノスとする見方に立ちながら，この「回心」を文字どおりに受け取ろうとする学者もいる。たとえばCaster, M., *Lucien et la pensée religieuse de son temps,* Paris 1937, 35以下：「ルキアノスの気違いじみた熱狂は，やや気取って記述されてはいるが，たしかに真摯である」，「真の回心」，「ニグリノスに関してもルキアノス自身に関しても，アイロニーの形跡は全くない」。とはいっても，「回心」してからの新たな，すなわち反俗的な，考え方と生き方をルキアノスが後々まで堅持したという主張はまず論外であろう。したがってこのような論者は，作者は若い頃（二五才頃）じっさいにニグリノスの教示によって電撃的な感化を受け，「人生の小暗い霧」を晴らして「誇り高い思い上がった人間になり，ささいなことにはもう全く意を払わない」（四～五章）ようになったのであるが，その状態は長続きはしなかった，といった捉え方をする（たとえばMacleod 1390「哲学への回心があったとしてもごく一時的であった」）。また「回心」を事実としつつも序論等のアイロニカルな口調を認める人は，いま四〇才頃の作者は一五年ほど前の自分の哲学に対する一時的な熱狂を，自ら可笑しがりながら回顧しているのである，などと説明する。

（5）Hall 158. その伝でいけば，ホラティウスの扱うのも「微罪」ばかりであろう。しかし彼も，後述のように，しばしば自己韜晦を図っている。

（6）Peretti（未見，Macleod 1389参照）らは，「回心」告白とローマ諷刺との関連を説明しようとして，本篇の主たる狙いを後者と見做し，それがローマ人ないし官憲の心証を害しないよう，無害なアイロニカルな「回心」談で包みカムフラージュしようとしたのだ，などと解する。ただし両者が主題的に密接に結ばれている，というのではなく，むしろそれによって生じる構成上の不調和自体が官憲の目を逸らす働きをする，と説く。なおPerettiは，浪漫的に，ルキアノスをローマに抵抗するギリシア知識人の一人，偽ヴォルテール，と見做す。

（7）「ホラティウス」は単なるタイプである，この作で彼の人格の戯画を，ストア派的熱狂者による描写を通じ，遊びを以て読者に提示することのできる詩人は（実際は）自分に十分自信をもっている，と説明するA. Kiessling-R. Heinze, *Horatius, Satiren,* Berlin 1968, 318以下，の解釈には賛同できない。首尾一貫しない自分への自信のなさそうな態度をあえて読者に示す，というのが本作品の狙いであろう。この意図に関わるかぎり「ホラティウス」はあくまで詩人自身である。

（8）Hall 244は，ディオンのこの作をルキアノスは念頭に置いていたかもしれないと考える。ただしディオンは，けっしてローマ人と対比してアテナイ人を持ち上げる，ということはしていない（二五章以下参照）

（9）Hall 245以下は，ユウェナリスやマルティアリスの作を想起させる細部が『ニグリノス』等には認められる，ルキアノスはユウェナリスを読んでいた可能性がある，と述べる。

(10) ローマ人としてのニグリノスについては，Jones 25 n. 7，および85参照。しかし Follet, S., in: Billault, A. (ed.), *Lucien de Samosate,* Paris 1994, 138は，アテナイにこの名前の名家があったことを記している。

(11) Hall 162以下は，「回心」に関わる熱狂的な言葉をアイロニーとしてではなく，かといって字義どおりにも取らずに，むしろ本篇の捧げられる相手たるニグリノスへの誇張的な世辞，と考える（ニグリノスを実在人物とする）。本篇はプラトンの作品のいくつかを模していると見做せるところがある。たとえばルキアノスがニグリノスの話を聞いている最中に支離滅裂な心理状態になったというくだりは，『饗宴』（二一五 e）で，ソクラテスから受ける影響についてアルキビアデスが，コリュバンテス信者の状態や，心臓の動悸あるいは落涙を持ち出すのに対応する。冒頭部も『饗宴』の出だしを想起させる。たとえば金持ちや実業家を哀れむアポッロドロスは（一七三 c 等），「勿体ぶった」ルキアノスの態度と似る。プラトンの著作を援用するのは，本篇がプラトン派の哲学者への称賛的献呈書であるからである。また，ニグリノスへの誇張的賛辞は，称賛演説の慣習から言っても特別異常なものではない，とする。しかし，誇張的賛辞の例として引かれる『スキュティア人』ではそれは，ルキアノスに（マケドニアでの）演説の機会を与えたりして便宜を図った実力者パトロンに捧げられているのに対し，ニグリノスは，今となっては実在したかどうかも確かめられないほどの無名の，実際上の社会的影響力を有さぬ人物であり，そのような卑屈な世辞をせねばならぬ理由がない。それがもし友人ないし師弟間の厚情を表現しようとしているというなら，その大げさな空ぞらしい調子はむしろ実意を疑わせ逆効果であろう。それは，Hall が引証しようとするプラトン『饗宴』冒頭部よりはるかに大仰で不自然である。

Lukians *Nigrinos* und die Satire auf Rom

Tsugunobu UCHIDA

Die angebliche Konversion, die der Erzähler im dialogischen Teil dieses Werks als seine eigene Erfahrung infolge des Vortrags des Philosophen Nigrinos erlitten haben soll, ist mit so übertriebenen rhetorischen, eher komisch klingenden Wörtern formuliert, dass man kaum an seine Ernsthaftigkeit glauben kann. Das wäre aber ein Mittel zur Verschleierung der satirischen Intention, mit der der hinter der Persona des genannten Erzählers versteckte Autor gegen Rom verfahren will. Nigrinos sei, so wird erzählt, ein Römer, und die das Römerleben kritisierenden Bemerkungen erinnern uns an die der römischen Satiriker. Das Werk könnte eine komplizierte Form der Satire sein, die zugleich mit den römischen Autoren in diesem Bereich wetteifern will. Dabei werden sie aber als 'Nigrinos' zum Sprachrohr von Lukian benutzt.